

盛岡城小噺

第9話

天守と二階櫓の風情

城郭はもともと、“戦い”に備え様々な工夫を凝らして築かれた施設であり、そのための構造や特徴の違いが、その城の個性として捉えられます。しかし、その魅力は機能的な部分だけではなく、城によって多種多様である意匠からは、城主たちのこだわりやその時代の歴史的背景を感じることができます。

盛岡城の二階櫓は、左記「復元基本図」にあるように、窓は格子窓を基本としています。外壁は、二階が黒塗壁、一階は漆喰塗となっており、一部に石落とし(床面に開口がある壁面から張出した部分)があったとも推定されています。

天守については分析等を実施していませんが、古写真や各種史資料などから、二階櫓と同様に赤瓦を使用した屋根には鯨がのり、窓には火灯窓が施された佇まいが思い描かれます。

実は、江戸時代は幕府による城郭統制が厳しく、権力の象徴とも考えられていた「天守」ではなく、三階櫓として実質上の天守を築くケースが多かったとされます。盛岡城もその一つであり、「御三階」と呼ばれていた三階櫓を正式に「御天守」と呼ぶことにしたのは、天保13(1842)年になってからのことでした。もしかしたら、その意匠等についても、あまり華美にはならないような配慮がされていたのかもしれませんが。

古写真にも写る天守や二階櫓は、盛岡藩や盛岡城のシンボルであるとともに、日常の風景でした。盛岡城は、当たり前のように人々の暮らしの中に存在し、その姿に安心感や愛着を持つ人も多かったのではないのでしょうか。

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、盛岡城復元調査推進室(019-613-7956)まで、情報提供をお願いします。



【本丸二階櫓等イメージパース】

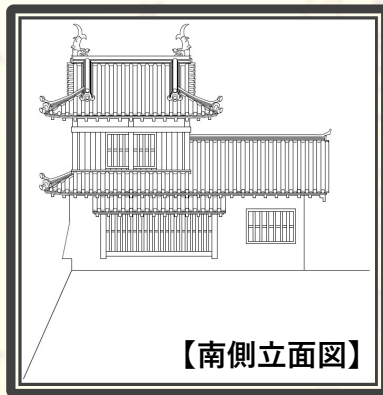
現在進めている歴史的建造物復元に向けた取組の中で、その復元の対象となっているのは、盛岡城本丸の南西部に位置していた二階櫓等の建物です。今回は、その二階櫓等の「復元基本図」を通して、在りし日の盛岡城の姿に、ほんの少し迫ってみたいと思います。



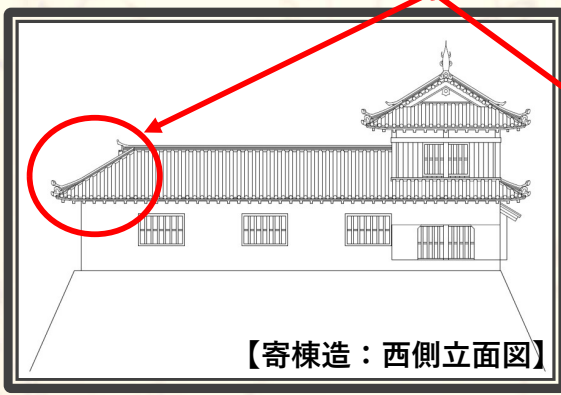
盛岡城日記

雑書

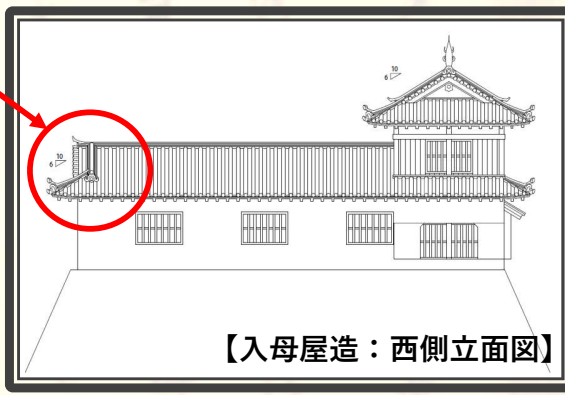
Vol. 9 2024年2月



【南側立面図】



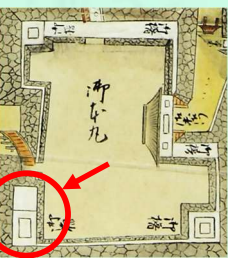
【寄棟造：西側立面図】



【入母屋造：西側立面図】

これらの図面は、あくまでも「基本図」であり、かつての盛岡城の姿として考えられるものの一つです。引き続き、専門家や文化庁の指導・助言を受けながら、さらなる調査や検証を進め、国が定める基準に従ったより史実に忠実な復元に向けて、その可能性を探っていきます。

二階櫓は、以前、この「盛岡城日記雑書」でも紹介した古写真や各種絵図等で、最も良くその形態が確認できることから、その復元の可能性について、現在、優先的に調査・検証を進めている建物です。



【二階櫓の位置】

「明和盛岡城図」より
：もりおか歴史文化館収蔵

その取組の一環として、古写真、史資料、発掘調査の比較検討・分析などをふまえ、上記のような「復元基本図」を作成しました。これは、現時点で推測される往時の二階櫓等の姿であり、外観(立面図)としては、古写真などから確認できる西側と南側の図面のみとなっています。構造は木造二階建、高さ(棟高)は五・四m程度、屋根は赤色の瓦葺であり二階の両端には鯨がのっています。現在の史資料等からは北側の屋根構造が判明しなかったことから、立面図は「入母屋造」と「寄棟造」の2種類があり、他にも平面図や断面図などを作成しています。専門的な知識がなくても、その様相を視覚的にイメージできる「復元基本図」は、復元に向けた今後の検討を進めていくために必要不可欠となる資料です。



「盛岡城古写真」の二階櫓：清養院所蔵